



コロナ変異株で緊急事態宣言が発出中ですが・・・(いつまでコロナが続くのか?)

心の栄養として読んでくれば嬉しいです。上：2/3

「21 世紀に生きる君たちへ」 <前半>

司馬 遼太郎

私は、歴史小説を書いてきた。もともと歴史が好きなのである。両親を愛するようにして、歴史を愛している。

歴史とはなんでしょう、と聞かれるとき、「それは、おおきな世界です。かつて存在した何億という人生がそこに詰めこまれている世界なのです。」と、答えることにしている。

私には、幸い、この世にたくさんのすばらしい友人がいる。歴史の中にもいる。そこには、この世では求めがたいほどにすばらしい人たちがいて、私の日常を、はげましたり、なぐさめたりしてくれているのである。

だから、私は少なくとも2千年以上の時間の中を、生きているようなものだと思っている。この楽しさは――もし君たちさえそう望むなら――おすそ分けしてあげたいほどである。

ただ、さびしく思うことがある。私が持っていない、君たちだけが持っている大きなものがある。未来というものである。

私の人生は、すでに持ち時間が少ない。例えば、21 世紀というものを見ることができないにちがいない。君たちは、ちがう。21 世紀をたっぴり見ることができるばかりか、そのかがやかしいにない手でもある。

もし「未来」という町角で、私が君たちを呼びとめることができたなら、どんなにいいだろう。「田中君、ちょっとかがいます、あなたが今歩いている 21 世紀とは、どんな世の中でしょう。」そのように質問して、君たちに教えてもらいたいのだが、ただ残念にも、その「未来」という町角には、私はもういない。

だから、君たちと話ができるのは、今のうちだということである。もともと、私には 21 世紀のことなど、とても予測できない。ただ、私に言えることがある。それは、歴史から学んだ人間の生き方の基本的なことである。

昔も今も、また未来においても変わらないことがある。そこに空気と水、それに土などという自然があって、人間や他の動植物、さらには微生物にいたるまでが、それに依存しつつ生きているということである。

自然こそ不変の価値なのである。なぜならば、人間は空気を吸うことなく生きることができないし、水分をとることがなければ、かわいて死んでしまう。

さて、自然という「不変のもの」を基準に置いて、人間のことを考えてみたい。人間は、――くり返すようだが――自然によって生かされてきた。古代でも中世でも自然こそ神々であるとした。このことは、少しも誤っていないのである。歴史の中の人々は、自然をおそれ、その力をあがめ、自分たちの上にあるものとして身をつつしんできた。

この態度は、近代や現代に入って少しゆらいだ。――人間こそ、いちばんえらい存在だ。という、思いあがった考えが頭をもたげた。20 世紀という現代は、ある意味では、自然へのおそれがうすくなった時代といっている。

同時に、人間は決しておろかではない。思いあがるということとはおよそ逆のことも、あわせ考えた。つまり、私ども人間とは自然の一部にすぎない、というすなおな考えである。

このことは、古代の賢者も考えたし、また 19 世紀の医学もそのように考えた。ある意味では平凡な事実にはすぎないこのことを、20 世紀の科学は、科学の事実として、人々の前にくりひろげてみせた。

20 世紀末の人間たちは、このことを知ることによって、古代や中世に神をおそれたように、再び自然をおそれるようになった。おそらく、自然に対してばかりかえっていた時代は、21 世紀に近づくにつれて、終わっていたにちがいない。

「人間は、自分で生きているのではなく、大きな存在によって生かされている。」と、中世の人々は、ヨーロッパにおいても東洋においても、そのようにへりくだって考えていた。

この考えは、近代に入ってゆらいだとはいえ、上に述べたように、近ごろ再び、人間たちはこのよき思想を取りもどしつつあるように思われる。

この自然へのすなおな態度こそ、21 世紀への希望であり、君たちへの期待でもある。そういうすなおさを君たちが持ち、その気分をひろめてほしいのである。そうならば、21 世紀の人間は、よりいっそう自然を尊敬することになるだろう。そして、自然の一部である人間どうしについても、前世紀にもまして尊敬し合うようになるにちがいない。そのようになることが、君たちへの私の期待でもある。

次号に続く

◆21 世紀も 2021 年になった。鉄腕アトムやドラえもんで描かれていた未来社会の一部は現実のものとなっている。これから先 AI は益々発達（成長）し、2051 年さらに 2101 年の世界はどうなっているのだろうか？当然僕は生きていない！君たちはどう生きる？